

比較文化論：複数の項目にまたがる研究：首狩りと身体変工の相関関係

著者	内堀 基光
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	183-186
発行年	1990-03-10
その他のタイトル	Comparative Analyses : Analyses of Combined Culture Elements : Head-Hunting and Bodily Deformation
URL	http://doi.org/10.15021/00003670

首狩りと身体変工の相関関係

内 堀 基 光*

- | | |
|---------|----------|
| 1. 首狩り | 3. 結果の判定 |
| 2. 身体変工 | 4. 考察 |

インプットされた民族集団の内、首狩り（4215）の存在が報告されているものは64民族である。これにボルネオ島の **Kayan**（依拠した資料のせいで首狩りがインプットされていないが、存在することは確か）を加えて65民族としたうえで、以下の考察をおこなう。首狩りと身体変工（2400）という、直接的な因果関係を想定することができない2領域の民族間分布を実験的にながめてみようとするものである。この2領域を選んだ初期の理由は、大林教授による「文身と他界観」の民族学的研究のなかで、首狩りによる戦功と文身との意味連関が、とりわけ他界における生前の戦功のマークとしての文身という観点から指摘されていたからである。

1. 首 狩 り

まず首狩りの分布から概観しよう。全体から見るとれることは、首狩りが大きく三つの分布域をなしているということである。すなわち、第1に、アッサム・ビルマ（この地域からインプットされた31民族のうち11民族に首狩りが報告されている）、第2に台湾を含む東南アジア島嶼部（おなじく59民族中34）そして第3にニューギニア（41民族中15）である。これらの集中的分布域以外には、ミクロネシアから1例（18民族中）、ポリネシアから1例（19民族中）、メラネシアから3例（32民族中）報告されているほかには、首狩りの報告は皆無である。これはきわめて特徴的な分布のパターンであり、従前から指摘されてきたように、首狩りと焼畑を中心とする低級農耕民の文化との強い連関の存在をあかすものと考えられる。ニューギニアをのぞくオセア

* 一橋大学社会学部

ニアにおいて首狩りが散発的にしか見られないのは興味深いことであるが、これには漁業と航海に結びつく生態学的条件を勘案すべきかもしれない。

あるいは農耕（豊穰）儀礼における首狩りの意義という古くから論じられながら近年ではむしろ軽視されている連関を再評価する必要も生じてこよう。また中国南部の諸民族やインドシナ・タイから首狩りがまったく報告されていないことも注目すべきことであり、この地の農耕諸民族の文化がアッサム・ビルマおよび東南アジア島嶼部の農耕民文化と大きく異なったものであることが示唆されているといえよう。より多くの文化項目の連関を解析することによって、この差異がそれぞれの文化の基層に由来するものなのか、あるいは高文明の影響によるものなのかを問う必要がある。

2. 身体変工

さて、首狩りのほうからみて、これと最も共存する率の高い身体変工は耳朶穿孔（2402）である。つまり65の「首狩り民族」のうち47民族がこの身体変工をおこなっている。ついで刺青（2410）が65民族中33族、癩痕文身（2409）が同17族、鑷齒（2406）と涅齒（2404）がそれぞれ13族、鼻栓（2403）が9族、抜齒（2405）が8族、表部割礼（2408）が7族、環状割礼（2407）が6族、そしてもっとも出現の低い頭蓋変形（2401）が1族となっている。これを便宜上、パーセンテージで表わすと、耳朶穿孔72%、刺青51%、癩痕文身26%、鑷齒と涅齒各20%、鼻栓14%、抜齒12%、表部割礼11%、環状割礼9%、頭蓋変形2%ということになる。

これらの数値によるかぎり、耳朶穿孔と刺青という2種の身体変工が首狩りをおこなう民族に半数以上の確立で見られること、また癩痕文身、鑷齒、涅齒の3種も比較的（2割から3割の確率で）しばしば現われるものであることがしられるが、こうした割合の意味というものは項目間の相関に関するかぎりあまりない。それは、身体変工にかかわる10の小項目のなかで、存在確認をうけている民族集団の全体数がそれぞれ大きく異なっているからである。

そこで身体変工の各項目の側から首狩りとともなう民族の数とその割合を算出してみるとつぎの結果がえられる。耳朶穿孔をおこなうものは38%（47/125）であり、同様に刺青の場合33%（33/99）、癩痕文身53%（17/32）、鑷齒37%（13/35）、涅齒36%（13/36）、鼻栓27%（9/33）、抜齒67%（8/12）、表部割礼32%（7/22）、環状割礼17%（6/35）、頭蓋変形17%（1/6）、という数値になる。これを大きいものからならべなおすと、抜齒をおこなう民族において首狩りをおこなうものの頻度が最大であり、つづいて癩痕

文身、耳朶穿孔、鑪齒、涅齒、刺青、表部割礼、鼻栓、最後に環状割礼と頭蓋変形という順序になる。

3. 結果の判定

ここで上の2系列の数値の意味判定をおこなうために、さしあたってごく簡単な排除処理を試みる。すなわち、全サンプル民族数(237民族)で当該の項目の存在する民族数を割って得られる期待値を基準として、それを下回る連関を取り除くことにする。第1の系列で排除されるのは環状割礼だけである。この項目は単純期待値が0.148(35/237)であるのにたいして、首狩りをおこなう民族におけるその出現率は0.092となっているからである。

第2の系列からは、首狩りの期待値0.21(65/237)を下回る出現率しか見せない環状割礼と頭蓋変形を排除する。この2者は首狩りと正の相関をもたない。結局、第1、第2の両系列のどちらからも排除されない項目は10のうち8であり、とりあえずここで首狩りと身体変工一般が比較的高い連関度をもっているという印象をうることができる。じっさい、相関関係においてより大きな意味をもつ第2系列のそれぞれの数値を首狩りの期待値0.27(27%)で割っておけば、その項目の期待値からの「上回り度」をうることができる。すなわち、抜歯2.5、癩痕文身2.0、耳朶穿孔1.4、鑪齒1.4、涅齒1.3、刺青1.2、表部割礼1.2、鼻栓1.0であり、のこる2項目が1以下となる。

このことから一応つぎのことがいえるかと思う。

8種の身体変工はすべて平均的に期待されているというよりも、高い頻度で首狩りをおこなう民族に出現する。その意味で首狩りとの相関度が高いと判定される。ただし、第1系列と第2系列の間には序列と各項目の数値に相当大きな違いが見られるので、この点についてはさらに考察が必要とされる。

4. 考 察

まず、2種の身体変工、すなわち耳朶穿孔と刺青に関しては、首狩りとの共存を示す民族の絶対数が少ない。とくに首狩りをおこなう民族が耳朶穿孔をともなう率(72%)はきわめて高く、これから判断すれば、首狩りと耳朶穿孔とのあいだには無視しえない随伴の連関がある。しかし、刺青とともに、上記の「上回り度」が抜歯や癩痕文身に比して低いということは、それだけこの連関の特定性ないし規定性が幾分よわいと

いうことを示すのであろう。すなわち、耳朶穿孔や刺青は東南アジア大陸部・島嶼部・オセアニアをとわず、きわめて一般的に分布する身体変工であり、その一般性のために首狩りをおこなう民族における「上回り度」が薄められているのである。

これにたいして、抜歯、癍痕文身などの身体変工は、「上回り度」が高い。すなわち、首狩りをおこなう民族がこうした身体変工をともなっているケースが数のうえではあまり多くなくとも（第1系列の数値を参照）、その意味連関の特定性は強いと考えなくてはならない。いいかえれば、これらは全体的な分布からみて比較的特殊な身体変工であり、しかもその特殊性が首狩りとの強い意味連関を示唆するようなものなのである。鑿齒、涅齒、表部割礼、および（程度はかなり落ちるが）鼻栓は、分布において特殊であるという点で、抜歯、癍痕文身に似ているが、首狩りとの意味連関の特定度は耳朶穿孔と刺青に等しい。

以上のようにみると、さらに若干の考察を加えることができる。耳朶穿孔は身体変工のなかでは装飾性の高いものであって、単に耳に穴を開けることによって完結するのではなく、そこに装身具を付けることに最終の目的がある。これにたいして、抜歯、癍痕文身、鑿齒、涅齒、表部割礼、刺青などはそれ自体で完結した身体変工であり、しかもその施術は多かれ少なかれ肉体的な痛みをともなっていることに特徴がある（一方、耳朶穿孔はたいていの場合、幼児期におこなわれる）。また耳朶穿孔は、他の身体変工とくらべて、女性がおこなう場合が相当であると推定される。こうしてみると、首狩りと特定の意味連関の強さを示す身体変工は、とりわけ男性に施される苦痛をともなう身体変工と考えることが許されるのではないだろうか。女性にもある程度ひろくおこなわれ、また苦痛度が他のものと比して幾分軽い刺青の「上回り度」（特定度）が相対的に低くなっていることも、こうしたことと関係するのかもしれない。

ここまで論を進めると首狩りの本質に相当近づいていくことにある。ほとんど定説となっていることだが、首狩りは優れて男性的な威信獲得の行為を称揚する習俗である。抜歯、癍痕文身などの身体変工は、こうした威信を重んずる社会にあって、首狩りの成功、あるいはそれへの参加資格をあらわすマーク、「真の」男であることの徽章となるわけである。これとの関連で付け加えれば、とくに耳朶穿孔と刺青について、それをおこなう性別の分布の精査がのぞまれるところであり、これによって身体変工と首狩りの相関はよりその内容にそった議論が可能になるであろう。